

三上治「書評:J・キーン著「民主主義全史」を読んで

大谷美芳(2022.12.23)



著者は言う。「集会民主主義の時代(メソポタミア—ギリシャ)、選挙民主主義の誕生(欧州—大西洋)、牽制民主主義の未来(挑戦を受ける多様な民主主義)」が、「世界的な民主主義の変化」。「権力の動きをチェック」する「牽制的民主主義」の「多様な展開の中に民主主義も未来をみいだしている」。これを肯定しながら、筆者は民主主義論を展開する。

その筆者の論を起点に、現代の大きな論点、「民主主義と権威主義」を考えたい。

①究極目標=社会主義がない 永遠の民主主義になっている

筆者は言う。「民主主義を、権力を抑制するための終わりなき過程とする。」現代の

国家は、ブルジョア民主主義も含め、賃金奴隷制の資本主義を護持するブルジョア階級独裁である。なのに、その国家を人民が「抑制」し「チェック」し「牽制」するだけになっている。

民主主義を、「国家の統治様式」と見ながら、現代国家の機能と本質や経済的土台から切り離して論じるからである。そうではなく、結びつけて捉えるのが、プロレタリア階級と社会主義の立場である。しかし、その前に……

②ソ連論と中国論 中心は管理の問題 社会主義における民主主義の基礎と共有制の内実

筆者は言う。「プロレタリア独裁という社会主義権力の確立が民主主義を実現」は「幻想」と「誤り」。「プロレタリア独裁による統治」は「党(官僚)独裁」と「権威による統治(権威と隷属という統治)」。ソ連や中国に絶望し、プロレタリア階級独裁と社会主義革命を諦めた、としか思えない。たじろいではいけない。

プロレタリア階級は最後の勝利までは敗北。パリ・コンミュンと同じく、ロシア革命も中国革命もそういう敗北である。50年でも100年でも総括すれば、展望は見えてくる。

ロシアも中国も、民主主義革命で、「プロレタリアートと農民の革命的民主主義的独裁」(NEPの実質)や人民民主主義独裁を実現した。しかし、工業化と農業集団化で、プロレタリア階級独裁=社会主義革命へ進む過程で、管理を担って登場した官僚主義が支配し、国家所有は官僚制国家資本主義へ、国家は官僚ブルジョア階級の

独裁へ変質した。

中国文化大革命は、官僚主義と闘争し、社会主義革命であったが、「私心と闘う」など、観念論の主観主義で破綻した(カンボジアのポルポト政権や日本の連合赤軍に連なる)。

総括すれば、労働者階級が官僚を統制し、やがて取って代わって自主的に管理する、そういう持久的な階級闘争を組織する必要があった。それが、社会主義における生産手段共有制を内実化し、民主主義を基礎づける。しかし、それができなかった。

③北アメリカ・西ヨーロッパ・日本 ブルジョア民主主義は終わる？ 基礎と土台で考える

資本主義では、賃金奴隷制の実体が、資本家と労働者は労働力商品を平等に売買する関係という仮象で、隠蔽されている。商品の等価交換関係の模写が民主主義であり、ブルジョア民主主義は資本主義に最も適合的な国家形態である。それが行き詰っている。

第二次大戦後、資本主義は高度成長し、労働者階級が増大し、社会民主主義が組織した(日本は社会党・総評から民主党・連合へ)。それがブルジョア民主主義体制の支柱であった。しかし、格差の拡大と貧困の蓄積、労働者階級が大分裂し、その支柱が崩れている。

根本で、資本主義の局面が移行している。停滞と金融化、第三次産業化と工業的空洞化、腐朽性と寄生性の増大など、金融資本主義である。新自由主義が、福祉・社会保障や選挙・議会など、民主主義の制度を空洞化した。それに、グローバリズムが引き起こした、米中覇権闘争を基づく帝国主義世界戦争や地球の自然環境の破壊やインフレなど、危機が覆い被さる。労働者階級の大分裂(日本は主に雇用差別だが欧米は難民・移民と民族・人種問題)は進み、政治化する。国家の強権化と軍備増強と民族排外主義。

ブルジョア民主主義は終わる、と言える。情勢を10年とか20年と長い目で見れば、1930年代よりも広く深い危機、社会主義革命とそれに対する予防反革命に向かう、と言える。第二次ブンドが50年前に超性急に言った、なし崩しファシズムだろう。

④「南」 権威主義はどうなる？ 資本主義の局面と労働者階級の状態から考える

20世紀後半、「南北問題」が言われた。今は「民主主義と権威主義」が言われている。その間にグローバリズムがある。資本主義の生命力は、「北」で尽きつつある。

しかし、「南」では続く。20世紀に、アジア・アフリカ・中南米で、植民地独立・民族解放から社会主義へ進もうとした革命は(それがマルクス・レーニン主義と国際共産主義運動)、破綻した。結果、今、国家主導で資本主義が成長し発展している。韓国・台湾からASEANと中国とインドへ、アジアからアフリカへ。世界的規模の不均等発展である。

後発資本主義は国家の強権に頼る。19世紀のドイツ・日本は専制君主制(ボナパ

ルティズム)、20世紀は権威主義(開発独裁)と官僚制国家資本主義(これは全体主義)である。

しかし、民主化闘争になる。資本主義が工業化=第二次産業化を進めると、労働者階級が増大し、その階級闘争も成長し発展する。労働者階級が人民を主導する。「北」の独日だけでなく、「南」の韓台でも、ブルジョア民主主義体制が成立した(19世紀後半のドイツと20世紀後半の韓国におけるプロレタリア階級の闘争)。

21世紀、ASEANと中印はどうなる? 「北」で起きたことは「南」でも起きるか? ブルジョア民主主義とその行き詰まりを経験しないと社会主義革命にはならないか?

⑤民主主義闘争は社会主義革命の陣地戦

北米・西欧・日本は今、経験している。しかし、社会主義のヘゲモニーが存在しない。破綻を総括し(ソ連論・中国論など)、新しい課題(エコロジーなど)に取り組み、社会主義を「ルネサンス」しなくてはならない。大分裂しているプロレタリア階級を下層に依拠して統一しなければならない。革命は、前途遼遠ではある。

それでも、人民は闘争する。「ミュニシパリズム」と言われ、著者と筆者は「牽制民主主義」と言う。それが大きな特徴だろう。人民が、国家と行政に対して参加し介入し統制し、空洞化した民主主義の制度を内実化する闘争、直接民主主義だろう。

しかし、「終わりなき過程」と考えるのではなく、終局目標の社会主義革命に向けた陣地戦=対抗社会、社会主義における自主管理へ連なる、そういうように考えるべきではないか。(おわり)